

# 超絶技巧！薩摩焼の世界

～ 日本の国益に貢献した明治輸出工芸の華 ～



薩摩焼の絵付けの様子

江戸幕府の滅亡による社会的動乱は陶磁器業界にも大きな影響を与えました。天皇が居住し文化の中心地であった京都は幕末の戦火により街が焼かれ、遷都によって天皇、公卿、商人は東京へ移っていきました。さらに明治維新によって従来の購入者であった大名や公卿等がいなくなり、庇護を失った御用窯は廃窯を

余儀なくされます。加えて同業組合の解散も重なり、陶磁器の製造者は大打撃を受け「都のやきもの」という京焼ブランドも失墜してしまいました。従来の制度は撤廃されましたが、明治政府の殖産興業の推奨により各陶工たちは次第に他地域への移動や窯業への新規参入などを行い再び陶磁器の製造が活発になっていきました。そして新たな販売先として注目されたのが「海外」でした。なかでもイギリス、フランスを中心としたヨーロッパへの販売に力を入れていきます。きっかけは1867年のパリ万博でした。薩摩藩が薩摩焼を出品したところ「極東の宝石」と評され、日本の陶磁器の人気に火が付き、以後の輸出向け陶磁器の製造の呼び水となりました。

陶磁器を有望な輸出品として認識した政府は、様々な政策を講じて輸出の後押しをしました。以降、薩摩焼は京薩摩(錦光山、帯山等)、大阪薩摩(藪明山)、神戸薩摩(司山、精巧山等)、東京薩摩(陶博園)、横浜薩摩(服部、保土田等)など日本各地で作陶され様々な発展を遂げていきました。

なぜ薩摩焼はこれほどまでに発展し、欧米諸国から求められたのでしょうか。その人気の理由は何と言ってもその細密さにあります。薩摩焼は世界で最も細密な絵付けが施された陶磁器だと言われています。当時の絵付け職人たちの技術は群を抜いて高く、肉眼では見えないほどの絵付けの作品も存在しています。欧米人が作品を購入しに工房に来ると、ルーペを持たせて作品を見せていたという逸話も残っているほどです。特に大名行列図や祭図などは圧巻の細かさの作品が多く、そこに描かれる人物図はわずか1～2cmほどの小ささであるにも関わらず顔の表情や衣装の模様にいるまで見事に描き分けられています。ご鑑賞の際にはぜひ、薩摩焼がいかにして発展していったのかということも含め、細密画の世界をお楽しみいただければ幸いです。

# 薩摩焼の年譜

## ～ 世界に雄飛した薩摩焼 ～

- 1598年 朝鮮出兵の際に島津義弘が朝鮮人陶工を連れて帰る
- 1610年 初代・沈当吉が苗代川焼を開窯
- 1628年 沈当吉は薩摩藩の命を受け、朴と共に白土を発見し本日の薩摩焼を創製
- 1823年 6代・錦光山宗兵衛、京都に生まれる
- 1853年 藪明山、大阪に生まれる
- 1856年 9代・帯山与兵衛、京都に生まれる
- 1867年 パリ万博に幕府、佐賀藩、薩摩藩が出品 \*現在のアルバート美術館が薩摩焼を購入
- 1868年 7代・錦光山宗兵衛、京都に生まれる
- 1871年 宮川香山、京都から横浜へ移窯
- 1873年 英国・ロイヤルウースターが薩摩焼を模倣した作品を作陶
- 1877年 西南戦争が起こり、薩摩陶業の沈滞
- 1879年 6代・錦光山がシドニー万博で銅牌を受賞
- 1883年 6代・錦光山がアムステルダム万博で金牌褒状を受賞
- 1888年 9代・帯山が銀牌をバルセロナ万博で受賞
- 1893年 米国雑誌「Clay Record」が、Meizan/Kinkozan/Taizan/Kozan/Tozanmの5名を名工と称賛。
- 1894年 日清戦争が勃発
- 1896年 宮川香山、陶磁器分野で2番目の帝室技芸員に任命
- 1900年 7代・錦光山がパリ万博にて金賞受賞
- 1904年 7代・錦光山がセントルイス万博にて大賞受賞
- 1905年 7代・錦光山がリエージュ万博にて大賞受賞
- 1906年 7代・錦光山がミラノ万博にて大賞受賞
- 1908年 7代・錦光山がロシア家具装飾万博にて大賞受賞
- 1916年 7代・錦光山が緑綬褒章受賞
- 1922年 9代・帯山与兵衛没す
- 1927年 7代・錦光山宗兵衛没す
- 1934年 藪明山没す
- 1935年 錦光山工房の閉鎖

